



西城卓也さん

医学部の教育の目的は、知識を身につけさせることだけではありません。これからの医師には、目の前の患者さんの背景や、複雑な社会の中から課題を見つけ、問いや解を探していく力が必要です。岐阜大医学部では、与えられた問題について決められた答えを探す従来の学習方法を見直し、学生自身が課題を見つけ、解決策を探る「Project Based Learning(PjBL)」を2025年度から始めました。

臨床実習前までの従来の学習

医学教育「課題設定」の力を

方法は患者の症例などを示し、学生同士で診断や治療方法を何も調べず議論をするものでした。教員は答えを教えず、学生が自分たちで問題点を見つけ、必要なことを調べるのを支えます。チーム医療の現場では、さまざまな職種の人と話し合いながら治療方針を決めるため、仲間と議論する経験自体には価値がありました。

時代が変わり、スマートフォンやAI(人工知能)を使えば、医学的な知識や症例の解説を短時間で調べられます。以前は1時間かけて議論し、図書館で本を探して調べることも自体に学びがありました。しかし、今はもっともろい答えにすぐにたどり着けます。唯一の答えが用意された問題について議論と教科書のみで考え続ける意味は、以前とは変わってきました。

だからこそ、答えを探す前の「問い」を学生自身に見つけてもらうことが大切です。PjBLでは、医学や医療を取り巻く社会の中から「これは課題では

ないか」「解決できたら面白いのではないか」というテーマを探します。AIも禁止しません。自分たちで、あるいは教員とともに考えた課題を深め、研究を進めるための道具として使ってもらいます。

取り組む時間も大きく変えました。2年生の冬に約30講座から興味のある分野を選び、約3カ月、研究の基礎を体験学習します。その後、3年生では午後3時以降をPjBLの時間とし、同じ講座の下でさらに1年間、2〜6人ほどのチームで研究を続けます。学生と教員が協働的に探究活動を行い、成果が出れば学会発表や論文執筆につながることもできます。

1年目のアンケートでは、学生の約7割、教員の約6割が「面白かった」と回答しました。一定の手応えを感じつつ、本当に好奇心や探究心が育ったのかは、これから検証していかなければなりません。

私が育てたいのは、知識だけを身につけた医師ではありません。患者さんの声に耳を傾けられる姿勢はもちろん、社会に好奇心を持ち、人に関心を寄せ、仲間と協力し、自分の行動をきり

かえり、成長できる医師です。医師は社会から見るとかなり特殊な集団。自分たちにとつての「当たり前」は、患者さんにとつての「当たり前」と異なることは多々あります。だからこそ医学生には、医学の知識という1枚の花びらだけでなく、探究心や社会性、協働する力、内省する力といった花びらを増やして、それぞれの花を咲かせてほしいのです。

AIが答えを出してくれる時代だからこそ、人にしかできない「問いを見つける力」が重要になります。学生と教員が一緒になって学びをつくる。PjBLを通じて、そんな共創型の医学教育を目指しています。

(構成・平子宗太郎)

さいき・たくや 岐阜大医学部・医学教育開発研究センター教授。専門は医学教育学、教員養成、総合診療。名古屋大学院で博士(医学)を取得。1973年生まれ。



知識を覚えるだけではない